
俺と魔術と陰陽道

井上 彰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と魔術と陰陽道

【Nコード】

N1620W

【作者名】

井上 彰

【あらすじ】

陰陽道の名門家に生まれた秋川真が使えるのは魔術だった!?

軽く(?) 主人公は最強です

プロローグ（前書き）

主人公は軽く（？）最強です

プロローグ

西暦2132年、魔術・呪術があり、魔術師、陰陽師という職業が一般社会に認知されている時代。

少年、秋川真はテレビを観ていた。

「昨日、地下鉄赤坂駅で魔術を使ったテロが行われました。」

テレビから聞こえてくるのは昨日起こったテロに関する事だった。

魔術、それはPDAを中継点としてこの世の万物を司る上位階層へ接続しこの世の理を変える力を発動することである。

また、この時代、魔術と対をなす物として呪術というものもある。

呪術、万物に流れている霊気をコントロールし呪符に送り込み、この世の理を変えずに力を発動することである。

力が強大であるが故に、現在魔術・呪術の行使が認められるのは魔術庁・陰陽庁・警視庁・検察庁・日本国陸海空軍に属する機関だけと法律で決められている。

そして、秋川家は現在陰陽家として名を馳せている家だ。

一通りニュースを見た真は

「じゃあ、行ってくるね。」

と今日から真が通う高校、国立異能力大学付属高校へと向かった。

国立異能力大学付属高校

通称異能高校

この国で唯一国立異能力大学校への推薦権が得られる学校である。
また、この学校には、魔術科・呪術科があり、二年になると、魔術科は魔術を発動するに必要なPDA等の機器の開発を主とする魔工科と戦闘分野に優れるための魔術特攻科に分かれる。しかし、呪術科にはこのような専攻は存在しない。

また、この学校の生徒は二級見習い魔術師・陰陽師として一部の魔術・呪術を行使が認められており、
いわば、魔術師、陰陽師の卵を育てる学校である。

そして、秋川真は魔術科の一年である。

なぜ、真が魔術科であるのは、小さいころから、真は呪術が扱えず、魔術が使えたからである。

「よお、真」

「おはようございます、真君」

今、挨拶した二人は順番通り説明していくと

こっちの暑苦しそうな男子は俺の親友の佐伯大輔さえきだいすけ

こっちの、女の子は安藤夏美あんどなつみ生まれた時から一緒にいるいわゆる幼馴染という奴だ。

「夏美だけ呪術科なんだよな」

大輔が不満げに言う

「だって仕方がないじゃない。私は呪術の素質を持ってたんだから。」

そう、大輔と俺は魔術科、夏美だけは呪術科なのである。

こんな他愛のない会話をしているうちに高校の門が見えてきた。

そして、俺は今から始まる高校生活に心躍らせていた

プロローグ（後書き）

一応、連載小説としてですが作者の都合上次ぎあがるかは未定ですが9月の中旬までには続きをあげられるように頑張りたいです

第一話 入学式

入学式――

佐伯大輔の父健吾が壇上で挨拶をしている。

「君たちもこの学校の生徒として」

よく聞くお決まりの挨拶だ

そんな退屈な時間が過ぎ今はHRの時間だ

俺は魔術科1年A組になった。大輔も同じクラスだった

「さて、これから自己紹介こうか」

のん気な声で言ったのは俺たちのクラスの担任 まつもとなおや 松本直哉先生だ

「じゃあ、最初は秋川君から」

「はい」

俺はこの学校では普通の人としての学校生活を送りたいと思っている。

そのためにはこの自己紹介はとても大事なものになるとも

「今日から、一年間このクラスでお世話になる秋川真です。どうぞよろしく。」

そう言った瞬間クラスの空気が変わった

「何か質問のある生徒は手をあげてな」

そう、松本先生が言うところの男子生徒が手を挙げた

「秋川というのはあの陰陽家の秋川ですか？」

やはりそこは聞かれる所か、予想していた質問だがどう答えていいのかさっぱり分からない。

「そうやで」

松本先生があっさり認めてしまった。

その瞬間、静寂だったクラスが一気に騒がしくなった。

「なぜ陰陽家の人間が魔術科にいるんですか？。」

矢継ぎ早に次の質問が飛んでくる

「それは魔術の素質があったからに決まってるやないか」

至極、真つ当な事を言っているのに男子生徒はとても不満そうだ。

「まあまあ、これから一年間同じクラスの仲間なんだし仲良くしなよ」

まあ、こんな感じに初めのHRが終わった。

H Rが終わつたあと、大輔が俺の席に来た。

「真、やっぱりお前が陰陽家の人間なのに魔術科にいるかに聞かれたよな。」

「まあ、陰陽家の人が魔術科に入るなんて異例中の異例だからね、仕方ないよ。」

「さつさと、夏美と合流して飯食いに行こうぜ。」

「ああ、そうだな。」

そういつて俺は大輔と教室を出る。

これから始まる波乱の日々を予想もせず……

第一話 入学式（後書き）

次は10月初旬までにあげます！！

第二話 秋川真の真実 part 1

2日目

今日は、新入生を対象としたオリエンテーションである。今日は一日学校内で自由に魔術・呪術の使用が認

められている。このオリエンテーションの時、先輩たちが魔術、呪術の演武を行い自分たちのクラブの勧誘

をすることになっている。

しかし、自分は陰陽家の人間なので、やはり魔術科の先輩たちからはいい目で見られてないらしい。

やはり、そのことからくる先輩もいて

「おい、その一年!」

「僕の事ですか?」

「お前以外にだれがいる、この一族のはみ出し者が」

「ささっと、この学園からいなくなれよ!」

先輩の言葉を皮切りに周囲の先輩たちも同調を始める

そういわれていたら僕の頭の中から、‘プツン’という音が聞こえたような気がした。

その時、頭の中に『殺せ、こいつらを殺せ！自分をばかにした奴ら
を殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺

せ！殺せ！殺せ！殺せ！』という憎しみや怒りなどが込められている声が響いてきた

「うあ ああああああああああああああああああああああ
あああ」

声が聞こえてきた直後、頭が急に痛くなりだした

しかしまだあの声は続いてくる

「お、おい大丈夫か？」

流石の先輩たちも心配してきた。

次に頭に響いてきた声は

「まあ、今日はこんなくらいに、してやろう。ひとつ教えてやる、我が名はオーディン。そして貴様は

私を使役している魔術師だ！

その瞬間、真の意識はぷつぷつと途切れた。

「ん・・・、ここはどこだ？」

一番最初に見えたのは真っ白な天井だった。

「やあ、気が付いたかね。」

すると、そこには軍服に身を包んだ一人の男性がいた。

「君はどうしてここに運ばれてくることになったか分かるかね？」

「すみません、先輩たちから悪口を言われたところからの記憶が抜けているんです。」

「記憶の欠落か」

「はい、すみません」

「いや謝る必要はないよ。君はね、途中から叫び声を出し始めたんだ、そして気を失った。そのあと、

我々が駆けつけて君をここに運んだ。という訳だ。」

「あと、すまないが君の体を検査させてもらったよ。」

「あのー、すみません。ここはどこなのかを教えてもらえないでしょうか？」

「ああ、これは失敬、失敬。ここは、日本陸軍異能力部隊付属病院で、私は、ここで医師をも務めています。」

「こばやし小林圭吾一等魔術正兼陸軍中佐だ。」

「で君は、秋川真君でいいね？」

「はい」

「真君、単刀直入に言わせてもらつ君は――」

「えっ、」

第二話 秋川真の真実 part 1（後書き）

この時、真が圭吾から言われた言葉とは！ 次話をお楽しみに！

第三話 秋川真の真実 part 2

「真君、単刀直入に言わせてもらおう君は六魔ろくまのつかいての使い手

という神を使役してる人なんだ。」

「えっ、つまりそれはどういうことなんですか？」

「えっと、つまり、まあ君は神の力を手に入れたってことかな」

それを聞いた瞬間、頭の中が真っ白になってしまった。

「ちょっと、それって………本当ですか？」

「ああ、本当だもの。ぶっちゃけっちゃうと俺も六魔の使い手だから。あっ、

これは一応、軍の機密事項になってるから他人言っちゃだめだよ。」

「もし、言ったらどうなるんですか？」

「まあ、軍の査問委員会の後、二年間の保護観察処分かな。」

それを一般人に言うあたり、この人は何か抜けてるっぽい。

「あ、ちなみに六魔ってことは、六の神などがいるってことですか？」

「いい質問ですね。」

いきなり、池。彰のモノマネをやりだした。この人がホントに軍人なのか心配になった。

「まあ、今の質問の通り、一応六魔の名は六の神々からついてるからね。」

「その神っていうが、オーディン、アヌビス、トール、ロキ、ポセイドン、エイルだ。」

中には聞いたことある名前や初めて聞いた名前だった

「そして、君の使役している神はオーディン。つまり、北欧神話の主神を使役

していることになるんだ。」

「そして、面白いことに。ほとんどの六魔が北欧神話にある神だからね。」

「それって、どういうことなんですか？」

「えっと、つまりだな。君は今北欧神話の主神を使役している。そこまではok?」

「そこまでは分かりました。」

「他の六魔はほとんど北欧神話に組み込まれているんだよ。」

「ここまで説明すればわかるだろ。」

やっぱりわかんなかった。

「すみません、簡潔に言っと？」

「簡潔に言っとだな、北欧神話に組み込まれている神なら、自由に命令ができる」

「るってことだよ！」

「これはかなりのアドバンテージだぞ。」

「はあ」

「なんだ、そのどうでもいいっていう顔は？」

「だって、関係ないじゃないですか。」

「何を言う、もう君は立派な魔術師だぞ？」

「は？」

唐突な言葉に頭が真っ白になった

「えっと、何を言ってるのですか？」

「法律でね六魔の使い手は三等魔術正以上ではならないと決められているんだ。」

「は？」

三等魔術正と言えはかなりのキャリア官職だ。

「そんな地位でいいのでしょうか？」

「何を言う、君はこの世に6人しかいないうちの一人なんだから胸を張ってれ

ばいいのだよ。」

「だけどね、六魔の使い手があるように、それに対抗するだけど力を持った人た

ちがいる。それは討魔の使い手だ。」

はつきり言って聞きなれない単語ばかりで脳がオーバーヒートしている

「討魔の使い手は歴史上の英雄を使役してる人をさすんだ。」

そこで小林はなにやら時計を見た。

「もう、こんな時間だ！早く話を終わらすぞ！」

「あ、はい。」

「あと、失礼かもしれないけど勝手に君の固有魔術を調べさせてもらったよ。」

固有魔術、それは誰もが持っているといわれている魔術式のことだ、

この魔術式は体

に組み込まれている為PDAを必要としない。

「で、どうだったんですか？」

「君はもっとも珍しい異種で零^{れいてんかいき}点回帰と呼ばれる魔術なんだ」

第三話 秋川真の真実 part 2（後書き）

まあ。更新おそくなってすみませんでした

次は11月の初旬にはあげたいと思いますので次回もお楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1620w/>

俺と魔術と陰陽道

2011年10月27日19時10分発行